

資料紹介

川合安平上海写真コレクションに写された“大東亞戦争博覧會”

中村 裕史（非文字資料研究センター 職員）

川合安平氏がまとめた写真リストを確認すると1942年11月26日から12月7日まで南京を旅行していることが分かる（1942年10月24日から10月末までは舟山諸島を旅行している）。訪問場所は「玄武湖、明孝陵、中山陵とその付近、一部南京市内」とあるが、詳細については「上海に関係ないので省略」と記されている。さて、当該期間の写真を見れば、この旅行の目的が“大東亞戦争博覧會”の見物であることが分かる。博覧會は1942年11月1日から12月10日にかけて開催されていたので、会期の終盤に訪れたことになる¹。総工費予算は当時の金額としては破格の35万円²。施工請負業者は当時国策会社となっていた乃村工藝社。会期中の入場者数は延べ60万人であったという。始めに、非文字資料研究センターが所蔵している博覧會のパンフレットの会場見取図を頼りに川合写真を見て歩きたい。その後で、外務省資料やいくつかの新聞を閲覧して、この博覧會の目的を確認したいと考えている。



（大東亞戦争博覧會パンフレット 裏面）

来り見よ・大東亞戦争博！

大東亞戦争！それは東亞民族の共同の敵アメリカ、イギリスと一群の適性を討ち、一世紀に亘る彼等の侵略の魔手を断つて、この東亞の天地に共榮の花を咲かせんとする聖なる戦争である。戦場は南方や太平洋のみではなく、遠く大西洋に戦線を求め、近き戦火はこの支那大陸にも燃えてゐる。この偉大なる大東亞戦争に於いて、皇軍將兵が血を以て築いた金字塔は、いま共榮大東亞の黎明に燦として輝きつゝある。大パノラマに勝利の歴史を回顧し、鹵獲兵器に米英惨敗の姿を偲びさらに、共榮館に建設戦の現実を見る。而して過去の偉大なる戦果に感激し、現在の正しき情勢を認識すると共に、未來に大いなる希望を抱いて、聖戦完遂への決意を鐵の如く鍛へるのである。（パンフレットより）



(川合安平氏撮影)

まずは切符売り場で入場料を支払う。パンフレットによれば、入場料は以下の通り。

「大人・新幣一元（金二十銭）、子人・新幣五角（金十銭）、團體（五〇以上）一般（五角）軍籍・學生（免費）（但シ前日マデニ事務所へ通知ノコト）」。



(川合安平氏撮影)

会場の翠洲へ通じる翠橋を渡ると、そびえ立つ正門表示塔が見えてくる。塔のてっぺんには日・華・満の国旗がはためいている。



(川合安平氏撮影)

次に見えてきたのは日本軍の【キ 32】九八式軽爆撃機だ。発動機は川崎「ハ 9-II 乙」液冷 V 型 12 気筒エンジン、850 馬力で最大速度 423 km/h、航続距離は 1,200 km。武装は 7.7 mm 機銃 2 挺と 450 kg 爆弾 1 発。製造は川崎航空機。最大の特徴は空冷式ではなく液冷式発動機を採用している点だが、性能が安定せず、整備工の評判は良くなかったⁱⁱⁱ。



(川合安平氏撮影)

歩みを進めると、会場の中心に“打倒英美”“完遂聖戦”“同甘共苦”といったスローガンが掲げられたラジオ塔がそびえ立ち、その下に英米から鹵獲（ろかく、英：booty）した兵器が並べられている。パンフレットには展示されている鹵獲兵器が紹介されている。どれもこれも旧式の武器ばかりで英米恐るるに足らずの印象が強くなる。



(川合安平氏撮影)

これは英国のビッカース小型戦車。イギリスのVickers 社が開発した戦車だ。その前で写真に納まっているのは川合安平氏。後ろには玄武湖に浮かぶ戦艦の大模型が見える。



(川合安平氏撮影)

この模型は戦艦陸奥の四分の一の大きさで、今回の博覧会の目玉の一つだ。当初、「大東亜号」という名称であったが、プロパガンダ戦略の一環で、汪兆銘（精衛）によって開催期間中に「長城号」へ改名された。



(川合安平氏撮影)

ラジオ塔や鹵獲兵器を眺めながら歩くと、特大パネルの一つに近藤日出造[※]が描いたミレーの「晩鐘」のパロディー版が見える。ルーズベルトとチャーチルが農夫婦に扮して涙を流しながら祈りを捧げている。奥には大東亜共榮館と大東亜戦争館が並び立っているのが見える。パンフレットには大東亜共榮館の説明として、「大東亜共榮圏各國の現状、日華兩國の政治、經濟、文化、産業建設工作、清郷工作の現状等各部門に亘つて寫眞、繪畫、圖表等に依り解説」とある。



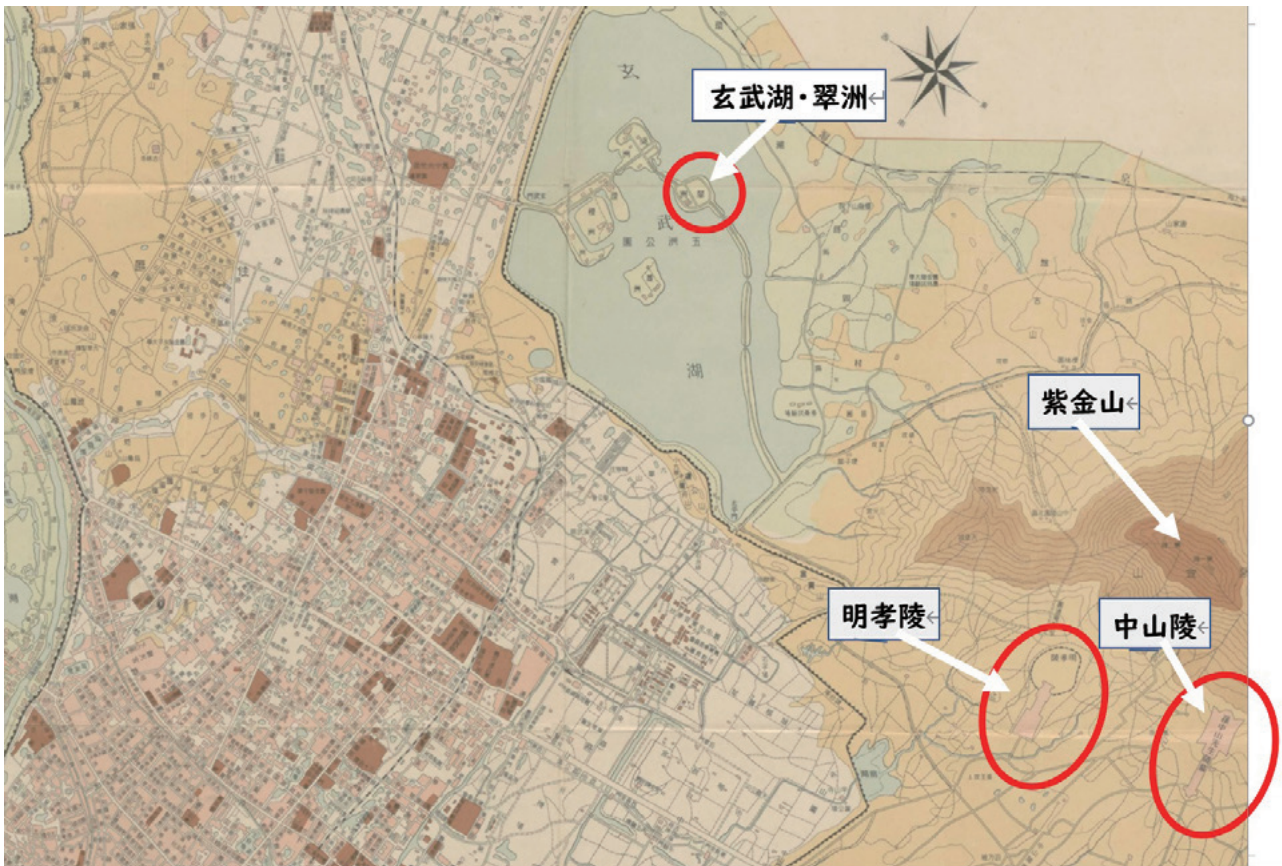
近藤日出造の傑作の一つ「晩鐘」（『漫画』特輯・間諜地帯 第十卷第七号 昭和十七年七月一日発行）非文字所蔵



(川合安平氏撮影)



展示されている鹵獲兵器の写真（大東亜戦争博覧会パンフレット表面より）



地図1 『最新南京地図』至誠堂、1938 を基に作成

（国際日本文化研究センター所蔵地図データベース https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=002237808）

野外の大パノラマや鹵獲兵器を見物しながら歩く。パンフレットによれば、パノラマには次の場面が描かれている。「1 富士山の春、中山陵の秋 2 香港攻戦略 3 ハワイ真珠湾攻撃 4 ジャングルを征く 5 マニラ人城 6 ボルネオ油田地帯確保 7 マレー沖海戦 8 航空母艦レキシントン撃沈 9 落下傘部隊パレンバン奇襲 10 ラングーン空襲 11 マンダレー突入 12 泰國風景 13 バンドン突入 14 コレヒドール島攻略 15 バリ島風景 16 ソロモン大戦 17 珊瑚海々戦 18 シンガポール攻略」

会場からは孫文が眠る中山陵がある紫金山の美しい山並みが見え、ちょうどパノラマの借景となり実に雄大である。中山陵は玄武湖から距離も近いので、是非とも足を延ばしたい観光スポットだ（地図1 参照）。



会場のパノラマの一部分（大東亜戦争博覧会パンフレット表面より）

次に、アジア歴史資料センターのウェブサイトから閲覧することの出来る外務省外交史料館の「[秘] 大東亜戦争博覧会開催要綱」を読んでみたい。

大東亜戦争博覧会開催要綱

- 一、名称
大東亜戦争博覧会
- 二、目的
大東亜戦争の意義を闡明し日華提携により聖業完遂に邁進する熱意を昂揚し以て重慶側抗議意志の崩壊を促進す、之が為
1、皇軍の赫々たる戦果及必勝不敗の実力を明示す
2、大東亜共栄圏の実情を紹介すると共に日本及国府に対する信頼の念を向上せしむ
- 三、主催 後援
主催 大東亜戦争博覧会委員会
後援 国民政府 支那派遣軍 支那方面艦隊 帝国大使館 興亜院華中連絡部
評議員 別に定む
賛助員 同
- 四、会場
南京 玄武湖畔
- 五、会期
自昭和十七年十一月一日
至同 年同月三十日
- 六、経費 予算
総額 四拾五萬円
資金調達 別に定むる所に従ひ支出するものとす
- 七、建築物
1、大東亜戦争館
2、大東亜共栄館
3、演劇場（映画其の他の余興を含む）
- 八、実施要領
■■各機関より選出任命せる人員を以て実行委員会を組織し其の指導の下に、東京より招聘せる権威ある専門家をして、企画、設計経営に任せしむ大東亜戦争博覧会委員会及実行委員会の編成に関しては別に定む
- 九、事務局
博覧会に関する事務を管掌する為事務局を置く
事務局の構成に関しては別に定む

また、開催の趣旨については、同じ外務省外交史料館所蔵資料の「大東亜戦争博覧会開催経過の概要」^{vi}に「開催の趣意」があり、上記「要綱」の「二、目的」と合わせて読むことで、この博覧会がいかなる目的の下で開催されたのかが明確になる。その一部を抜粋する。

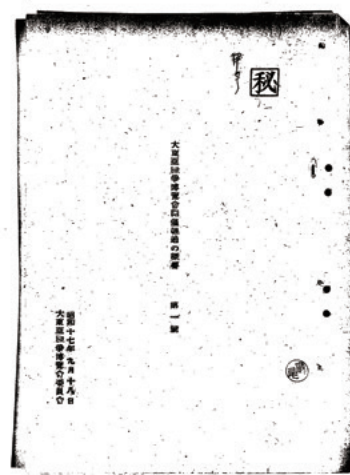
大東亜戦争博覧会開催経過の概要

一 開催の趣意

(前略)

大東亜戦争勃発以来月を閲する僅かに十箇月、其の間皇軍は雄渾無比の大作戦を展開して有史未曾有の大戦果を挙げ、過去百年に亘る米英東亜侵略の牙城は今や全く潰滅せられ米英の勢力は大東亜の天地より一掃せらるるに至れり。今や日本帝国必勝不敗の体制は厳として確立せられたり。

過去百年の永きに亘る米英搾取の桎梏より解放せられたる南方諸地域の住民は日本を盟主と仰ぎ欣然大東亜復興の聖業に協力しつつあり、国民政府下新中国亦同甘共苦の精神を以て大東亜共栄圏建設のため衷心携協力しつつあるも此の際新中国民衆に対し、皇軍の赫々たる戦果及日本の必勝不敗の力を認識せしめ日本及国民政府に対する信頼の念を向上し以て日華提携による聖業完遂に邁進する決意を鞏固ならしむると共に大東亜共栄圏内の実情を紹介して東亜解放大東亜共栄圏確立への熱意を昂揚せしめ以て反米英思想の■釀、重慶側抗戦意識の崩壊を促進するは極めて重要な意義を有するものと謂はざるべからず。(後略)



『大東亜戦争博覧会開催経過の概要』
昭和十七年九月十八日

さて、大東亜戦争博覧会に関する研究は少ないが、柴田哲雄氏は汪兆銘（精衛）政権のイデオロギー研究の観点から、中国大衆に対するプロパガンダとして、この博覧会がどのように機能していたかを究明している^{vii}。博覧会は実質的には日本主導の下で推進されたが、プロパガンダの面では汪政権が前面に出てくるように演出されていた^{viii}。柴田氏によれば、建設された二つのパビリオンのうち大東亜戦争館が目指したことは、日本の戦勝面を飾ったり旧式の英米の鹵獲兵器を展示したりすることにより皇軍の赫々たる戦果及必勝不敗の実力を見せることで「重慶政権と同じく日本の敗北必至と考えるようになった人々に対して、日本軍必勝の信念を吹き込もうと



した。さらにはアヘン戦争以来の反アングロ・サクソンのナショナリズムに訴えて、人々に日本の対英米戦を中国の反植民地闘争の一環として認識させようとした」ことにあるとしている。そのようにして汪政権への中国民衆の支持を高める意図があった。また、もう一つのバビリオンである「大東亜共栄館において、中国部と日本部を並置した意図は、孫文の大亜細主義を汪精衛が継承し、中日両国が協同で対英米戦を遂行するという理念を体现すること」にあったとしている。柴田氏はこのことを展示内容からだけではなく、『中華日報』に掲載された開幕日の林柏生宣伝部長の記者会見談話等を論拠に展開している^{ix}。



(1942.11.02『中華日報』*)



(「汪兆銘と畑総司令」パンフレットより)

新聞報道について

引き続き、当時の様子をうかがうために新聞記事を参照してみたい。まずは、大学契約のオンラインデータベース〈朝日新聞クロスサーチ〉で検索してみると、11月2日の「大東亜戦博 南京にひらく」(120文字程度、写真無し)1件がヒットするだけで、これでは日本国内

ではほとんど知られることはなかっただろう。

続いて、1939年(昭和14)1月1日に上海で創刊された日本語新聞『大陸新報』を、神奈川大学図書館が所蔵しているマイクロフィルムを使ってブラウジングしてみた。日本国内に比べれば掲載回数は多いが、どれも三面記事扱いで、ご当地の一大イベントにしては意外と扱いが大きい。例えば11月1日の一面記事は「大東亜省力強く発足」であるし、11月2日の三面は博覧会の記事よりも、むしろ上海神社の鎮座十周年と秋季大祭が重なったことで六万人の参拝者で賑わったことを伝える記事の方が大きく扱われている。

博覧会関連記事の見出しと概要を一覧にしておく。

日付	見出し	本文概要
10.31	呼物はパノラマ 大東亜戦争博覧会あす開幕	野外大パノラマ、玄武湖に浮かぶ戦艦大模型、鹵獲兵器などの見どころ紹介記事〈写真あり〉三面 約310文字
11.2	各国高官も参観 大東亜戦争博覧会開く 厳かに修祓式	各国高官の参観。観覧者は1万人を超えた。修祓式は前田南京神社宮司〈写真あり〉三面 約540文字
11.3	入場者数二万を超ゆ 大東亜戦争博覧会二日目の賑ひ	初日未完成の戦艦模型が完成。2日目入場者数1万2千人超。
11.5	博覧会のお記 一	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.6	博覧会のお記 二	三浦乃亜による一コマ漫画と文
	人気を呼ぶ遊藝館 博覧会気分愈々高潮	六日目報告記事。特設館中もつとも人気は遊藝館。〈大きめ写真あり〉二面 約440文字
11.7	博覧会のお記 三	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.8	博覧会のお記 四	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.8	入場者一万超ゆ 大東亜戦争博七日目	簡単な報告記事。写真無し
11.9	博覧会のお記 完	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.10	南京玄武湖博覧会のお記 その一	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.11	南京玄武湖博覧会のお記 その二	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.12	南京玄武湖博覧会のお記 その三	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.13	十九万人に達す 東亜博開場以来の入場者	11日までの総入場者数19万名。22日は荒鷲部隊が会場上空で模擬空中戦を展開予定。
11.13	南京玄武湖博覧会のお記 その四	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.15	鹵獲魚雷も公開 大東亜博愈々大人気	帝国潜水艦の潜望鏡、鹵獲米国製魚雷が公開され人気となっている。三面 約200文字
11.16	南京玄武湖博覧会のお記 その五	三浦乃亜による一コマ漫画と文
11.17	南京玄武湖博覧会のお記 終	三浦乃亜による一コマ漫画と文



（『大陸新報』11月10日、三浦乃亜 南京玄武湖博覧会のごぞ記 その一）



（『大陸新報』11月11日、三浦乃亜 南京玄武湖博覧会のごぞ記 その二）



（『大陸新報』11月12日、三浦乃亜 南京玄武湖博覧会のごぞ記 その三）

上海漫画家クラブのメンバーである三浦乃亜^{vi}の連載漫画は一コマ漫画に博覧会場で見聞きしたことを肩の凝らない文章で紹介している。露骨なプロパガンダ報道の中にあって、本当にあったのだろうと思える内容であり、現場の直接的な雰囲気を与えているという意味で存外貴重な記録となっている。以下に一部を転載する。

（1945.11.05）

大東亜戦争博覧会が、好天続きは何としても有難い。団体客が断然多い、今日も××会社から、〇〇女学校から二千名三千名の御来場である。一列縦隊が長々と秩序正しく続いて居るのはいいとして、パノラマのあたりでは右を見ては左へ左が済むと又右へ、何の事はない此大行列が蛇の様に場内を練って歩く風景はさしもの大会場も一寸人に喰はれた感じだった

（1942.11.06）

中国民衆が博覧会見物中の挙動は仲々愉快だ。ラジオ塔から音楽が鳴り出すとどうして之が音を出すのか知らんと不思議そうに撫で廻してゐるのがゐる。そうかと思ふと遊藝場で折■相■（日本の漫才ならん）がはじまるや連れて居た子供をソッチのけにしてスグとんで行く子供は泣く会場入口では殺到する観客が我先になだれこんで来る。喧嘩が初まる。監視人が飛び出す。あつちでワラワラこつちでキャアキャアイヤ向うもその賑やかなことソロモン海戦そこのけである。

（1942.11.11）

博覧会には会場職員として約百名近くの日華人を擁して事務局、電話局、遊藝場、切符売場、食堂、喫茶部、監視人、清掃人、とそれぞれ配置してある。彼等彼女らには図のような装いの制服を着せて居る。此の中、中国人の監視■や清掃人夫は演藝場で曲藝や芝居が始まると仕事をおつぱり出して制服を脱いで一般客に交じってノホンと見物して居ると言ふ。『これじゃあ監視人の監視人が要るって訳です』と事務局の先生弱って居た。

（1942.11.12）

秋冷時ならぬ湖畔の賑はひに萎びた蓮の葉も一時にノビをする程の玄武湖の昨日今日、会場付近ではあの手この手と博覧会の余恵をうばひあつてゐる。先ず舟、玄武門で乗物を止められ、後は会場翠橋まで徒歩、それよりも■船で静々と乗込も悪くないとあつて、この方のお客さんは押すな押すな、自動車の預り業がこれ又一日平均三百台、料金は時間なしの一台一回五角とあつては女房にでもやらせたいような商売である。この他付近の茶館、菜館、露店商人何れもこのところ博覧会様々で出来れば向ふ一年も続けて頂きたいと云つた顔つきである。

（1942.11.16）

南から通つた博覧会に来て皆さんに御機嫌を伺つてゐる動物の中で可愛い猿の小孩子が■個ゐる。柵も網もない鎖一つの奴さん、或日此鎖がはずれて一匹行方不明となる。動物係の先生始めのうちこそ「ナニニさる者は追わずですよ」と平気で居たが纏て夜が来る、冷えてくる、流石に可哀想になつて来て扱ては徹宵会場くまなく探して廻る騒ぎ、やつと大東亜共栄館の屋根上でキキキ啼いてゐるのを発見。『日曜日は兵隊さんにウンと可愛がつて貰うんだよ』と御馳走をやつたり頭を撫でたり。

本稿は川合氏個人が撮影した写真をアプローチの手掛かりとしているため、一個人としての川合氏の立ち位置を大切にしたいと考えたが、なかなか難しい。大上段に構えた国策メディアの中にあつて比較的自由に執筆しているように思える三浦乃亜の連載記事は、一参観者としての川合写真に言葉を付与しようとする時に有効な手立てとなるように思われる。ただし限られた文字数のため情報量の少なさは否めないし、検閲を経て掲載されていることは当然の前提である。

次に中国語の『中華日報』や『新申報』を閲覧したいところだが、神奈川大学にはマイクロフィルム所の蔵がないので果たせていない。柴田氏の研究を手引きにINTERNET ARCHIVEで閲覧できるかぎりの紙面を確認した。例えば既述した博覧会開催当日の様子を伝える11月2日の『中華日報』においては、一面記事として写真付きで大きく掲載されており、本稿の注に試訳を掲載した林柏生宣伝部長の談話があり、また社説でも大きく取り上げられている。同日の『新申報』においては三面記事ながらも『中華日報』とまったく同じ写真を使用し大きく報じられている。



中山陵へ

さて、一行はこの後、玄武湖からほど近い中山陵、明孝陵、国民革命紀念館などを訪れているが、紙幅が尽きたので写真を一枚ずつ掲載しておく。広葉樹はすっかり葉を落とし寒そうな冬景色であるが、紫金山の山麓あたりの松林で楽しそうに宴会をしている写真もあり、初冬の南京旅行を楽しんだようだ^{※xii}。



中山陵 (川合安平氏撮影)



国民革命紀念館 (川合安平氏撮影)



明孝陵の石像 (川合安平氏撮影)



(川合安平氏撮影)

注

※川合安平上海写真については NewsLetter50 号の孫安石教授の論考を参照のこと。

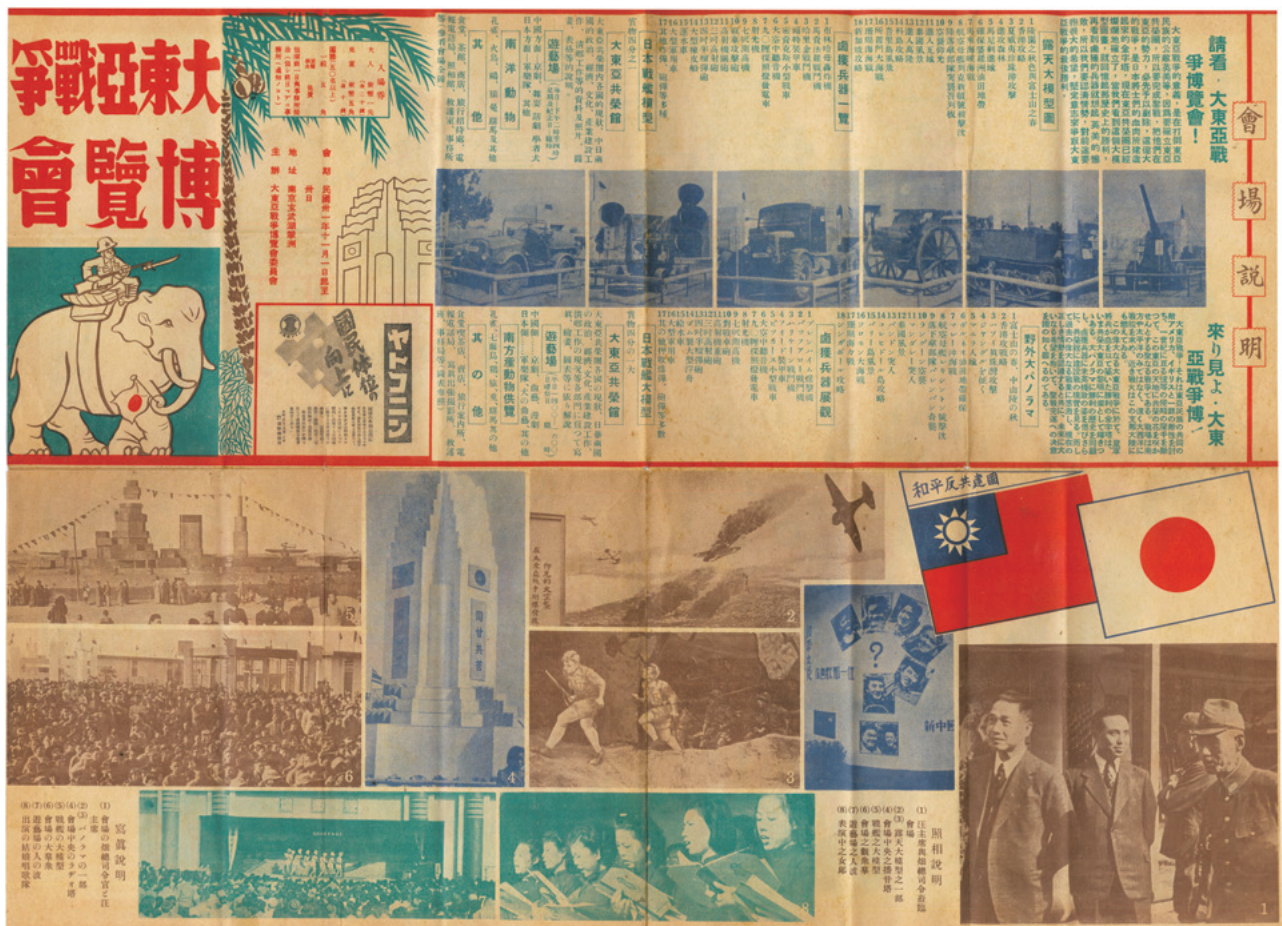
- i 当初、会期は 11 月 30 日までだったが 12 月 10 日まで延長された。特に 8 日と 9 日は大東亜戦争記念の意味で入場無料にて開放し、10 日に閉会式が執り行われた。
- ii 乃村工藝社『70 万時間の旅』によれば、靖国神社の外苑展示一回の請負額が 2 万円であったことから、これがいかに莫大な予算規模であったかが分かる。この請負により戦中の経営基盤が安定し戦後のいち早い再起にもつながったという。
- iii 軍用機の性能については『日本陸軍軍用機パーフェクトガイド』（学習研究社、2005）に詳しい。
- iv 雑誌『漫画』の表紙には近藤の描く似顔絵が掲載され好評を博した。峯島正行によれば「われわれが、チャーチル、ルーズベルト、蒋介石というとすぐ頭に浮かぶあの顔は近藤の描いた顔なのである」（『近藤日出造の世界』青蛙房、1984、195 頁以下参照）。
- v 「本邦博覧会関係雑件 20. 大東亜博覧会」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012268800、本邦博覧会関係雑件（I-1-6-3-2）（外務省外交史料館）46 画像目
- vi 同、Ref. B04012268800、本邦博覧会関係雑件（I-1-6-3-2）（外務省外交史料館）43 画像目
- vii 柴田哲雄、やまだあつし編著『中国と博覧会』第 6 章 大陸の博覧会—汪精衛南京政府下の大東亜戦争博覧会
- viii 大東亜戦争博覧会委員会と実行委員会のメンバー構成からも明らかだ（同、Ref. B04012268800、49 画像目）。
- ix 『中華日報』に掲載された開幕日の林柏生宣伝部長の記者会見談話は、大東亜戦争博覧会と汪政權との関係を考えるうえで重要であるので、以下に試訳を掲載する。この試訳は Google ドライブの OCR 機能により新聞画像をテキストデータ化した後に Google 翻訳と DeepL で自動翻訳したものを比較検討して作成した。

【中央通信社南京 1 日】大東亜戦争博覧会が昨日盛大に開幕し、汪主席が関係者が出席した後、出席した国内外の記者らは林柏生宣伝部長に感想を求め、林氏は次のように演説した。「今日、ここで大東亜戦争展示会が開幕しました。汪主席をはじめ、各機関・部門の責任者が直接視察に訪れました。彼らはさまざまな展示物に深い感銘を受けました。私は二つの思いを抱かずにはいられませんでした。一つは、70 年前、国父孫文の誕生から 6 年後、日本が明治維新を成功させた当時、アジアは英米の侵略下にあり、東南アジア各地も相次いで侵略を受けていました。アジアは英米の侵略下にあり、南洋各地が侵略者の植民地となったが、幸いにも日本の台頭が障害となり、日露戦争で侵略者に正面から打撃を与え、中国人民も国父に導かれて、中国の復興、中日の協力、東アジアの解放のために奮闘しました。この闘いは、昨冬の大東亜戦争まで 70 年続きました。戦争は最終段階に突入し、東アジア諸国の勝利を可能にする光が見え、東南アジア諸国が侵略者の足かせから解放され、私たち東アジア人に東アジアの本当の姿が戻ることで、これは日本の栄光であるのみならず、東アジア全体の栄光でもあります。今日、大東亜戦争のさまざまな成果を目の当たりにする私たちは、この勝利が偶然ではなく、先進国が過去 70 年間に、国中の無数の心血と物的資源を代価に獲得したものであることを知るべきです。第二に、7 年前の今日、汪主席は演説中に党中央本部で暴徒に狙撃され、3 発の銃弾を受けましたが、その時、主席は、一方では国父の遺教に従い、既定の方針に従って、中日関係の改善を図り、他方では、日独防共協定

への参加を提唱し、世界情勢の悪化に共に対処しようとし、同時に、中国がイギリスに欺かれて日中関係を手に負えない危機に陥れることを防ぐことを願って、リース＝ロスの法幣政策に反対しました。「中国が英国に欺かれ、日中関係が制御不能な危機に陥ることのないように」という政策が実現できていれば、この7年間で日中関係は異なる歴史的道を歩むことになっていたであろうし、両国は過去5年間の痛ましい出来事をもはや経験せず、今日、中国はその国力を利用して大東亜戦争に協力することができていたでしょう。この日提唱された理念は主席の負傷により実現できなかったが、7年前のこの日、この時に汪主席が流された血は、アジアにおける中目の志士が主席の指導の下、大東亜の包括的平和の実現を促進し、戦争終結への道を切り開くために、全国の青年、全国民を総動員し、友好国と苦楽を分かち合う（友邦同甘共苦）ために努力する唯一の道となりました。大東亜戦争を完遂すること、これは私の個人的な感情だけでなく、私の同志や運動の思いでもあります。』

- x 「中華日報」はINTERNET ARCHIVE で閲覧した（参照 2023-11-1 https://archive.org/embed/zhonghua-ribao-1942.11.02）。

- xi 三浦乃亜は『大陸新報』がバックアップして設立した上海漫画家クラブのメンバー。他のメンバーは、可東みの助、サバジョウ、マックス、シフ、馬午、フリーデン、太平龍、萬籟鳴、三井直鷹、ゲラシモフ。上海漫画家クラブの研究は木田隆文氏が詳しい（例えば、高綱博文[ほか]編『戦時上海のメディア：文化的ポリティクスの視座から』、研文出版、2016 など）。なお、三浦乃亜の戦後の活動だが、例えばNDL デジタルコレクションによれば、1950年代前半に『東京だより』『現代人』といった雑誌に、マンガと文章で相変わらず肩の凝らない街の紹介記事などを掲載している。オンラインDB〈ヨミダス歴史館〉を検索すると、1950年の7月から10月にかけて四コマ漫画の連載をしている。1950年代中頃以降の消息は不明である。
- xii 近年、戦時下の観光に関する研究がすすんできている。例えば、ケネス・ルオフ『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』、森正人『昭和旅行誌：雑誌「旅」を読む』など。川合写真を戦時下ツロリズムの文脈で読み解いてもおもしろいかもしれない。



（大東亜戦争博覧会パンフレット 表面）

参考文献

- ・橋爪紳也監修『別冊太陽 日本の博覧会：寺下勲コレクション』平凡社、2005
- ・橋爪紳也著・監修、乃村工藝社編『博覧会の世紀 1851-1970』青幻舎、2021
- ・寺下勲編『博覧会強記』エキスプラン、1987
- ・柴田哲雄著『協力・抵抗・沈黙：汪精衛南京政府のイデオロギーに対する比較史的アプローチ』成文堂、2009

- ・柴田哲雄、やまだあつし編著『中国と博覧会』第6章 大陸の博覧会——汪精衛南京政府下の大東亜戦争博覧会』成文堂、2014
- ・堀井弘一郎、木田隆文編『戦時上海グレーゾーン：溶融する「抵抗」と「協力」』勉誠出版、2017
- ・プロジェクト HON 編『70 万時間の旅』乃村工藝社、1975
- ・NHK アーカイブス〈南京を飾る大東亜博覧会〉（参照 2024-1 https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009180744_000000）